

---

# 真・恋姫＋無双～麒麟児、外史を駆ける～

ring

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真・恋姫十無双〜麒麟児、外史を駆ける〜

### 【Nコード】

N1308U

### 【作者名】

ringg

### 【あらすじ】

麒麟児と呼ばれた勇将、姜維伯約。彼は目論見の失敗によってついにその体を貫かれた。その事実上の姜維を知る主人公は、彼が知るような世界とは違う、女性だらけの世界に姜維伯約として転生してしまう。守るべき者を知った時、彼はどうするのか。麒麟児の新たなる活劇が始まる。

## ハジマリ（前書き）

クロス学園執筆の合間に、気分転換での投稿です。かなり不定期になる可能性が高いですが、生暖かく見守ってくださいな。

注意：作者は原作のゲームを知りません。アニメは見たのですが、知識はかなり乏しい可能性があります。色々おかしい点が生まれるかもしれませんが、ご指摘の際はご容赦をお願いいたします。

また、キャラ崩壊が起こる可能性があります。そういうのが苦手な方は即刻ブラウザバックをお願いいたします。

では、楽しんでいただければ幸いです。

## ハジマリ

男は、忠義を貫いた。

いくら敗れようと、一人になろうと、戦いつづけた。

……しかし、志半ば、彼の夢は潰えた。

無念であつただろう。最後まで国に尽くしたが故に、自らの寿命を縮めた。彼が仕えていた王は、天寿を全うしている。アホらしい。配下を死なせて、上に立つ資格は無い。

……男も、早々にその王を見限るべきだったのかもしれない。それでも彼は忠義を貫いた。

そんな彼が、俺は好きだった。歴史上の人物としては間違いなくトップに入るくらいに。

……だからって、なあ……。

- - 俺が、姜維伯約に転生するとは - -



## 麒麟児 and 伏龍

目が覚めた。

「……知らない天井だ」

……いや、ごめん。嘘。よく知ってる天井だ。

てか、もう見飽きたぐらい見上げた天井だ。もうかれこれ五年は見上げているからな……何故言っただのか？ ……電波を受信したんだよ。

自分の男にしては長い紅髪が寝癖でボサボサになっているのを感じる。とつとと起きて、髪を直そう。

「さて、起きるか……ありゃ？」

起きようとする、左手に重みを感じる。……こんなことをするのは、二人しかないが……左手だから、恐らくはアイツだ。久しぶりに来たか、刺客……！

体の左側に目をやる。刺客は体をまるまる布団にくるみ、俺の左

手にしがみついている模様……いいだろう、刺客。今日は負けんぞ  
！！

自由な方の右手で、布団を跳ね上げ、刺客の姿を現す。

「朱里！！ 寝るのは構わないが、自分の寝床で……」

寝ろ、そう続けようとしたが、続かない。なぜならば……

「むう……むにゅむにゅ……」

かわいかったから。寝てる朱里……諸葛亮が。……こんな幸せそ  
うに寝てるのを起こせと！？ 無理っ！！

結果 - - 負け。 敗因 - - 朱里がかわいすぎ。 通算成績 - - 105  
8戦1058敗。

というわけで、朱里が起きるまで、腕を貸す羽目になる。……ま  
あ、可愛い朱里の寝顔が見れるから役得っちゃあ役得。

「それにしても……」

つくづく横で寝る朱里の顔を見る。この少女が、『俺という別の存在』が師に仰いだ人物だとは……。いや、朱里だけじゃない。今まで会った三国志の有名人物 - - 朱里を入れてまだ四人しか会っていないが - - はすべて、女なのだ。

あ、自己紹介が遅れたな。俺の名は姓が姜、名は維。字は伯約。姜維伯約。真名は……。おっと、まだ言えないな。俗に言う『転生者』という奴らしい。

だが、神とかいうのには会ってはいない。前世でどう死んだのかも覚えてはいない。とりあえず、目が覚めたらこの世界に赤ん坊として生まれていた。そういう訳だ。

生まれは史実通り涼州の天水郡。親からはたびたび文が来ているから無事であろう。

ちなみに、前世の記憶も曖昧だ。名前とかは思い出せないが、三国の歴史は何故か記憶に残っている。

……だから、何故俺がこんな時期にいるのか皆目見当がつかない。姜維は三国の歴史では、諸葛亮の北伐で初登場のはずだ。そこで諸葛亮の策に敗れて降伏し、以後は諸葛亮の弟子、蜀の武将として行動していたはずだ。



まあ、これに関してはいくら考えても分からないから、考えることをやめている。……どこぞのカーズの台詞みたいだが気にするな。

俺は、ここ水鏡女学院にて五年ほど前から修学を続けている。……何故男の俺が女学院に入れているのか。理由はただ一つ………拝み倒すと、水鏡先生に俺が気に入られたからだ。……あ、二つ言っちゃまったな。

まあとりあえず、水鏡先生に気に入られたから俺はここで修学出来ている。男一人の生活にももう慣れた。

学問はかなり頑張っていると言える。姜維だから元がいいのだから、それでも現時点では朱里や雛里……あ、鳳統な……に負ける気は無い。まあ直に抜かれることは覚悟している。何せあの二人は伏龍に鳳雛。いくら麒麟児でも勝てる気はしない。

だからこそ、俺は武芸も磨いている。確か歴史では、姜維は趙雲に舌を巻かせるほどの武芸を誇っていた。それを思い出し、武芸にも手を出してみたのだが、これが大当たりだった。

いつか、暇をみて街まで出た事があったが、その時に二十人ほどの賊に襲われた。相手に油断もあったかもしれないが、無傷で二十人全員叩きのめしてやった。

いやー、スカツとしたね、マジ。その時から暇を見つけては賊を探しに行って叩きのめしてた。その内『三叉の鬼』とか言われるようになってたな。あ、三叉ってのは俺が使ってる武器が三叉槍だからだ。

「むう……う？ あ、あれ？」

っと、とりとめもないことを考えている間に、朱里が起きた。目をぱちくりしながら、俺を見つめている。

「……おはよ、朱里。よく眠れたか？」

「あ、おはようございます」

俺の挨拶に対して礼儀正しく挨拶を返す朱里。礼儀もなっていてい子だよ本当に……。

俺がそんなことを思っていると、朱里が現在の状況に気づいたらしく、とたんにあわあわしでした。

「あ、あれ！！ な、なんで私はこんな所にいるんでしゅか！？  
あう、噛んじゃった……」

……どうやら朱里は、何故俺の寝床に入ってしまったのか分からないようだった。いつものように寝ぼけて入ってきたのだろうが、俺はふといたずら心が湧いて、朱里をいじる事にした。

「ひどいな朱里。昨夜はあんなにお楽しみだったのに……」

「はわわあ！？」

「あ、そうか。激しすぎたから忘れちゃったかな？」

「はわ！？ え！？ え！？」

「にしても初めてにしては手慣れてたよね。……あ、そうか。艶本のおかげ？」

「はわあああああああ！！」

いや、本当に朱里はいじりがいがある。こっち系で攻めれば、すぐこんな風にテンパるのだ。やれやれ……もうちょっと冷静に周囲の状況を見れば、そんなこと有り得ないって分かるのにな。どうにも朱里にはツメが甘い所がある。

「はあ……冷静になれ、朱里。もしも『そんなこと』になっていたとして……何故俺とお前は服を着てるんだ？」

「えっ？」

「言つとくが、俺は『そんなこと』をした後にわざわざ服は着ないな。面倒くさい」

「え？ え？ まさか……」

「ま、そのまさかだな。もうちょっと周囲を広く見ることも重要だ。覚えておくといいぞ」

そう言うと、朱里の肩がふるふる震えだした。……あ、地雷踏んだか？

「炎麒君の……バカアアアアアアアア！」

「ふげ！？」

朱里の物の見事なスクリーンブローが顔面にねじ込まれる。……  
朱里ってこんな力あったっけか。今度から武芸も教えてみるかな……  
…。

薄れていく意識の中、俺は漠然と思った。

- - 母上様、今日も私、炎麒は元気にやっております - -

## 麒麟児、同門と過ごす

「朱里ちゃんずるいいいいいい!!」

「だ、だって、偶然だったんだもん!!」

あー、今日も朝から賑やかだな。……朱里のスクリーンブローは痛かったが。どうも、水鏡女学院の良心こと、姜維だ。え？ 呼ばれてないってか？ あはは、だって自称だからな。

現在は俺は朝食を咀嚼中。うむ、旨い。

「雛里ちゃんだって一昨日潜り込んでたくせにいいいい!!」

「あああああれは偶然っ!!」

さて、この場の説明といくか。今俺の前で吼えて騒いでる二人、片方はさっき俺の布団に潜り込んできた朱里。もう片方は、さっきの話にも出たけど、鳳凰の雛、鳳雛こと、鳳統だ。真名は雛里。

なぜ喧嘩をしているのか。実はさっき、俺と朱里が布団にいた時に、雛里が俺達を起こしにきたのだ。……その時に、俺達二人が布

団にいたのを見ちまった訳で。状況を把握するのに並外れた知能をフル活用したらしい雛里は、案の定間違った方に解釈。そこから現在、朝食の時間までの言い争いに発展している訳である。

……しかし、こいつらは何で喧嘩をしているのか。俺の布団なぞ、面白い物でもないのに。

さて、このままなら朱里は羽扇からビーム出しそうだし、雛里は杖持ち出して竜巻起こしそうだから止めるか……。

と思つた時、二人の頭をぐわしと掴む手が現れた。その手は指に力を込めて二人の頭を締め上げる。……これをやるやつは一人しかない。顔を上げると、いつも通りの蒼髪に、仏頂面だがなかなか容姿淡麗でスタイルもいい女が目に入る。

「……二人とも、何を騒いでいる」

「いたたたたたた！　ギブですギブウ〜！！」

「そ、蒼里<sup>そくり</sup>さん、痛いです〜！！」

二人が泣き声を上げるが……二人の後ろに現れた女はやめる気配も無く、締め上げつつける。

この女の名は徐庶。字を元直。真名はさつき雛里が言ったように蒼里。俺と同時期に水鏡女学院に入った女で、朱里や雛里の姉貴分かなり頭も切れる上に、剣の扱いも見事の一言につきる。……欠点と云えば、仏頂面すぎるのか。

にしても朱里、ギブなんて言葉をどこで知った……？

二人は手をじたばたさせてなんとか蒼里の手を逃れようとするが……力で蒼里に適うわけがない。

「朱里に雛里。食事中は静かにな……わかったら返事!!」

「は、はい!!」

蒼里は規律にかなり厳しい。とはいえ話は分かるし、いい奴だ。多少の話では何とも言わないし、宴会は別。

「炎麒、お前も厳しく言うべきだぞ？」

「……俺が騒がせた原因だからな。何とも言えんよ、蒼里」



「全く……」

呆れたようにため息をつく蒼里。まあ、それ以上文句を言わない分、なんだかんだで面倒見もよくていい姉貴分だ。

そのまま蒼里も交えて朝食になる。本日は蒼里が作ったはずだ。

「そっだ、三人とも、今日もやるんだろ？」

「はい、当然です!!」

「今日こそは……」

「うむ、参加するとしよう」

三人に見違えたように気合が入る。今日こそは俺に勝とうと考えているのだろう……だが、まだ抜かれる訳にはいかないぜ!!

「よし、ならとつと食っちまうか。早く用意するぞ」

『はいっ（ああ）！！』

難しい顔で盤面を睨む。対面には朱里が、右隣には雛里が、左隣には蒼里が同じく真剣に盤面を睨んでいるのが感じられる。

「よし……！うっです」

朱里が盤面に手を伸ばし、騎馬隊の一隊を動かす。

これはいわゆる指揮演習で、お互いが一軍を率い、駒を動かして指揮をする。兵法の実習と考えてもらって差し支えない。今は俺対朱里だ。

さて、今の朱里の一手だが……完全な敗着だ。確かに今俺の本陣の守りは甘く、攻めているのは簡単に見えるが……。雛里は気づいていないようだが、蒼里は気づいたらしい。息を吐く音が聞こえた。

「朱里、それは敗着だ」

「えっ？」

朱里は蒼里の言葉に狐につままれたような顔をする。……相変わ

らずツメが甘い。今回は俺に勝てる久しぶりの機会だったが……。

「朱里、こうしたらどうする？」

歩兵を動かし、朱里が動かした騎馬隊に当て、動きを止める。騎馬隊というやつは機動力が肝だが、一度戦闘に入るとその機動力も使えなくなる欠点がある。

「はわわ、止められてしまいました!!」

「よし、騎馬隊進撃」

朱里の騎馬隊が機動力を失った隙に、こちらが騎馬隊を二部隊に分け、挟み撃ちで本陣に攻めいる。騎馬隊の機動力を存分にいかし、一息に本陣を陥れた。

「はわわわ!! 負けちゃいました……」

「惜しかったな朱里。確かに俺の本陣の守りは甘かったが、それに乗って騎馬隊を進撃させたのが敗着だ。勝利を焦ってもいいことは無い。勝てる好機にこそ、冷静にな」

敗着点を教えると、みるみる朱里がしぼんでいく。……元々小さいのに、さらにしぼんでどうするんだこいつ。

「はわわわ……これで1058戦1058敗です……」

……気にするな。俺も別の戦いで1058戦1058敗だからな。

「大丈夫だって。お前は俺より才がある。いつしか俺を抜く時が来るぞ」

そう言いながら手を伸ばし、朱里の頭を撫でる。しぼんだ朱里を戻すにはこれが一番なのだ。

「あつ……えへへ」

朱里がほにやあと柔らかく笑う。うん、いい笑顔だ。この笑顔を見れるだけでも役得役得。

「むう……朱里ちゃんばかり……どこかに藁人形は……」

「……性格変わってないか、雛里？」

……俺が朱里を撫でている間、雛里がぶつぶつ何かを呟き、蒼里がそれに突っ込んでいたのは余談だ。

## 麒麟児、同門と過ごす（後書き）

オリキャラの徐庶さん登場。史実では諸葛亮より年上では？  
と思ったので、姉貴分的存在です。と

## 麒麟児、外史へと踏み出す

「炎麒、蒼里。少し旅に出て見聞を広めてきたらどう？」

「……はあ！？」

只今、俺と蒼里は水鏡先生と会談中。……だが、いきなり何だと隣にいる蒼里もいつもの仏頂面が崩れ、ぽかんとしている。

「旅に出ると？ なぜまたいきなり」

「そうです。納得いく説明をお願いします」

いきなり旅に出るだと言われても、こちらら戸惑うばかりだ。朱里や雛里なら絶賛「はわわ」「あわわ」状態になってるだろう。……いかん、想像してたらなんか可愛い。

「あなた達二人の知謀と武芸は相当な物。あと足りないのは実践などの経験。それを養うには、旅が必須よ」

「そりゃ分かりますが……戦に従軍しないとその経験も養えないでしょう」

当たり前のことを言ってみる。今は戦と言えば諸侯が賊相手に戦うのがせいぜい……いや、待てよ。確か三国志の序盤、最大の山場は……。

「これは噂だけど……最近賊の数が急に増えているそうよ。官軍や諸侯も賊征伐に駆り出されているそう。経験をつむなら今が機会よ」

……やはりか、と俺は納得した。中国全土を巻き込んだ大反乱、黄巾の乱が近いのだ。確かに今が経験を積むには絶好の機会だろう。

……こんな有名人物がみんな女の黄巾の乱つてどんなんだろうか。もしや張角やらも女では……。……なんかあんまり深刻さが感じられない。

「それに……朱里や雛里のこともあるの」

「二人の……？」

蒼里が眉を潜める。……なるほど。そういう理由もあったか。

「あの二人は俺と蒼里に頼りっきり……そう言いたいんですね」



「そうよ。二人は知ってる通り、親族をたらい回しにされてここに来た……あなた達二人を、今はいない家族として、兄として、姉として見ているの」

それは悪いことではないだろう。むしろ俺は歓迎してもいい。だが……二人の将来を考えると、親離れならぬ兄離れ、姉離れも必要だろう。

「そうですね……私にも、二人には私達に頼らずにやってみてほしいという気持ちもありましたから」

「あの二人は将来俺や蒼里を超えて、国を背負って立つような……いわば韓信（漢の高祖、劉邦に仕えた名将にして大元帥。『背水の陣』という言葉を生み出した）のような戦術家になると思っています。そのためなら協力は惜しみませんよ」

「では、了承してくれるのね」

「「当然!!」」

俺と蒼里の答えに先生が初めて笑顔を見せた。

「二人ともありがとうね」

「では、準備に取りかかりますね」

俺と蒼里は立ち上がる。そこに、先生がまた声をかけてきた。

「……あ、あと炎麒」

「なんですか？」

「あなたは今、朱里や雛里を韓信に例えたわね」

「ええ。それが？」

先生は、そこでいたずらっぽく微笑んだ。

「あなたにだって、韓信になれる才はあるわ。もちろん蒼里にもね」

「……はあ!?!?」

本日二回目。ぴったり蒼里と息が合う。それを見て、先生はくすくす笑いながら席を立ち、どこかに行ってしまった。残された俺達は、顔を見合わせる。

「……とりあえず、支度するか、蒼里」

「……ああ、賛成だ」

準備はとんとん拍子にすみ、一週間後。俺と蒼里は出発することになった。……のだが、出発目前になって問題発生。

「え、えぐう……えんぎぐうん……」

「ぞ、ぞつりざんも……」

すなわち、朱里は俺に、雛里は蒼里にひつつきつつの泣き顔。……  
……いかん、いかんぞ姜維伯約。決心が乱れるじゃないか!! ……  
……だが!!

「そんなに泣くな、朱里。今生の別れでもないだろう」

「で、でもお……」

「そんなことよりもだ。俺と蒼里が帰って来る時まで、ここを今のままにしておいてくれよ？ 帰る場所が無くなっちまう。そして……俺を超えてみる。お前ならやれるさ」

「お前もだぞ、雛里。私や炎麒を超えてみる。才はあるんだからな」

そう言いつつ、二人で頭を撫でてやる。……今日からこの感触を味わえないとなると寂しいが……これも二人のためだ。

「は、はあい……わかりましたあ……えぐっ」

「こ、超えてみせます……うつつ」

なんとか二人は泣き止み、決意表明をする。俺や蒼里を超えるか……楽しみだ。

「……じゃあ、蒼里、行くか」

「……………ああ」

二人で門を出て振り返る。朱里と雛里と先生が見送ってくれている。それに手を振るのはそこそこに、すぐに踵を返して歩きだす。……………今の顔を見られたくないから。

「……………泣いてんのか、蒼里」

「ぐす……………うるさい、お前もだろつが」

「……………ああ」

だって俺も蒼里も、涙をこらえられなかったから。

**麒麟児、外史へと踏み出す（後書き）**

次回、主人公とオリキャラ紹介となります。

主人公、オリキャラ設定（前書き）

そろそろストックが切れそうです……。

## 主人公、オリキャラ設定

### 主人公設定

姓：姜

名：維

字：伯約

真名：炎麒麟

声：三木眞一郎（Fateのアサシン、ガンダム00のロックオン）

武器：三叉槍『コウリュウウガクセン昂龍顎閃』。ぶっちやけ真・三国無双4の姜維のユニーク武器。

容姿：体は鍛えこんでおり。身長は高く、180はある。男にしては長い（首までである）紅髪を持つ。顔は控えめに言っていていい方だが、少し目つきがキツめ。

性格：基本的に穏やかだが、自分が気に入らない、またウザイことや人などにはキレることが多い。しかし、怒声を上げるタイプではない。

### 概要

いわゆる転生者。だが、自分が死んだ覚えもなければ、名前も思



い出せず、記憶も曖昧である。かろうじて三国志の歴史だけは覚えているようだが、現代の技術などは覚えてはいない。つまりは歴史以外全て三国時代の人間だと言える。

出身は涼州天水郡。年齢は朱里の二つ上となる。見聞を広げる為に天水を飛び出し、水鏡先生を拝み倒して水鏡女学院に学ぶ。

特に兵法に優れるが、彼が知る姜維が内政を省みず蜀を滅亡させたことを知っているので、経済、算術、地理、農政等も学んでいる。

また、武芸も独学ながら身につけており、その腕は一对多数でも無傷で相手を壊滅出来るほど。

詳しく言えば、知謀では経験を積んだ朱里や雛里には及ばず、武芸は愛紗や鈴々には上回るが、恋には適わない。ただ、防戦だけ考えれば二十合は打ち合える。

年下の朱里や雛里を可愛がっている。真名も交換している。

史実の姜維は魏に仕えてから蜀に仕えていたが、彼はそれに準じるつもりは無いらしく、君主の人格などで判断するらしい。ただ、欲を言えば朱里や雛里と一緒にいたいなーと思っているらしい。

#### オリキャラ紹介

姓：徐

名：庶

字：元直

真名：蒼里そつり

声：沢城みゆき（学園黙示録の毒島冴子、ローゼンメイデンの真紅）

武器：長剣『雷斬』ライキリ

容姿：背が170センチと高く、スタイルもいい。ロング蒼髪で仏頂面。ちよつとキツいが整った顔立ち。イメージ的には『学園黙示録』の毒島冴子がイメージ。

性格：固く、規律を重んじる性格だが、プライベートでは意外と気さく。頑固な一面もあるが、相手の意見も取り入れる柔軟な一面もある。

### 概要

炎麒と同時期に水鏡女学院に入り、修学を続けていた女武将。兵法などの知略にも長けているが、幼いころから学んでいた剣の使い手でもあり、その腕は見事の一言。炎麒の武芸は彼女と戦う事で養われた。

朱里や雛里の姉貴分で、真名も預けている。炎麒は信頼しているが、恋愛相手としてはみてないそう。

ちなみに炎麒と同じ年。

## 麒麟児、友と駆ける

出発して一週間。俺と蒼里はすでに問題に直面していた。

「経験を積むには戦に従軍するのが必須……」

俺の背中に蒼里の声が響く。

「といっても、どうやって従軍すればいいのだ？」

「俺に聞くな、俺に……」

聞かれても困る。いくら賊が多いと言っても、戦に出るならどこかの官軍か、諸侯の軍に入らなきゃならない。近場で言えば名君と有名な劉表か……だが。

「軍に入った所で、いきなり軍師として登用される訳ないしな」

「そうだ。せいぜい一兵卒が精一杯。今諸侯に入っても経験なんか積めない」

いきなり軍に入って軍師にしてくれなんて、話を聞かれる訳がない。と、なると……。

「……義勇軍か」

「ああ。だがそれも難しいぞ。何と言っても兵を集める名声も無ければ、金もない。その上に後ろ盾もないからな」

その通りだ。兵を集めるには圧倒的な名声に、これまた圧倒的なカリスマがいる。カリスマは俺や蒼里に無いとは思えないが、名声は俺達のようなしがない旅人にある訳がない。

そしてもしも名声があったとしても、金がない。ただで働く兵はない。兵糧だって必要だ。誰が何と言おうと、金は必要なのだ。

「ならまずは資金集めか、炎麒」

「どつやってだ。地道に働いててもたまる物じゃないぞ、金は」

はっきり言うが、金とは貯まらない物だ。いくら働いても、税だの何だので取られる。しかも俺達は義勇軍を起こすほどまで金を貯めなければならぬ。

「今俺達にいるのは後ろ盾だ。少しぐらい金をだしても大丈夫なくらいの大商人とか……」

「劉表みたいな諸侯か、だな。そいつらに私達の力を見せつけて、後ろ盾になってもらえばいいわけだな」

「そついうことだ」

そんな事を話していた時、いきなり後ろから話しかけられた。

「おい、おめえら」

「ん？」

振り向くと、人相が壊滅的などこからどうみても雑魚役が三人、俺と蒼里を睨んでいた。

「見慣れねえ顔だな、何もんだお前ら」

「何もんだとは何だ。俺はお前らみたいな人相が壊滅的な奴らに知り合いはいないが。蒼里、お前は？」

「私にいると思うか？ 思ったのならお前の頭も落ちたものだな、炎麒」

「無視すんじゃない？ てめえらこの状況分かってんのか！？ 舐めてんじゃないぞ！？」

軽口を叩いているうちに、俺と蒼里は周りを十人ほどの賊に取り囲まれていた。……おい。

「これだけか？」

「ああ！？」

「足りないな。私と炎麒相手にひいふうみ……十二人か」

舐めてるのはお前らだろ、と声を大にして突っ込みたい。十二対一。……甘いな、甘すぎる。

「ふ、ふざけんなてめえら！！ やっちまえ！！」

構わず臨戦態勢に入る人相が残念な賊。……さて、例によって。

「分かってるな、蒼里？」

「ああ。倒した数が少ない方が……」

「「晩飯おごりな」」

背中に背負った布の包みを解き放ち、槍を握り、構える。昂龍顎コウリュウウガ閃。クセシ俺はこの三叉の槍にそう名をつけた。幾たびも賊の血を吸った俺の愛槍だ。

「んじゃいくか!！」

手始めに真っ先に飛びかかってきた一人の首を容赦なく突き刺し、絶命させる。

続いて後ろから斬りかかって来た奴の剣をかわし、腹にを石突きを叩きこむ。あっけなく吐瀉物にまみれて倒れる賊。その首に刃を突き立て、二人。

「三人、四人……」

次々と賊を突き刺し、斬り殺す。虫を殺すのと変わらない。人間なんて、簡単に死ぬのだ。……だから、俺は戦う。死にたくねえからな。

「五人……」

五人目を斬り殺し、蒼里をちらりと見る。蒼里もちょうど五人目を斬り殺した所だ。あと残っているのは首領と雑魚一匹。

「……晩飯をおごりたくはねえんだよ!!」

地を蹴り、首領に向けて走る。蒼里も同時に地を蹴り、首領に向かう。

「う、うわあああ!!」

逃げ出そうとする首領。だが……今更遅い。

「はあッ!!」



蒼里の刃が首領の首を落とし、同時に俺の槍が胸を貫く。頭が落ち、胸に穴があいた間拔けな彫刻の完成だ。

「俺が突き殺した!!」

「私が首を落としたんだよ!!」

言い合いながら、残る雑魚に顔を向ける。雑魚は呆然としており、何が起こったか分かっていないようだ。

「……さて、あとは貴様だけだな」

頬の血を拭いながら蒼里が言う。そこまであって、ようやく雑魚は我に帰ったようだった。武器を放り投げ、一目散に逃げ出す。

「た、助けてくれえええ!!」

うお、馬も真つ青な速さだ。人間は根源的な恐怖に行き当たった時、足がすくんで動かないと言うが……ありゃあ嘘かな。……いや、まだ俺がそこまで達してないという事か。

「追っぞ、蒼里」

「弱い奴は恐怖を知ると親玉の所に逃げる……全くその通りだな」

二人で雑魚を追っていく。雑魚はやられると、必ず親玉の下に逃げる。つかず離れず追っていけば賊の親玉にたどり着けるだろう。

「案の定、か」

「ここまでうまくいくと拍子抜けだな」

そして見事にいかにも親玉がいそうな石の砦にたどり着く。古びてはいるが、なかなかの砦だ。

「へえ、山城といっても差し支えないほどでかいな」

「造りも基本的にはしっかりしてるな。古びてるからあちこちほころびがあるが、それも直せばいい程度だ」

口々に言い合いながら中へと入っていく。緊張感なんてまるでない。城はでかいが、おそらくは人は少ない。たった十二人で盗みを働こうとしたことからそれは明らかだ。しかも……

「見張りがいないのは不用心にすぎるな」

「ああ。そんなに人がいないのか……」

門には見張りすらいない。それに割く人もいないと推測できる。

堂々とがらんとどの城の中に入り、何やら騒がしい奥を目指す。  
おそらくは親玉がいるだろう。しかし入り込んでも誰にも会わない  
とは……。

「もしかしたら今は集会中かもな」

「考えられるな」

大分歩き、閉じられた部屋の前に立つ。中は広間のようで、大勢  
が騒ぐ声が聞こえる。

お互いの顔を見て軽くうなずき、扉を蹴破る。さて……。

「仕事中悪いな」

鬼が出るか蛇が出るか。どちらでも面白そうだが。

麒麟児と秀才と賊主（前書き）

長らくお待たせして申し訳ありません。ちよいとリアルが忙しく、書けませんでした。

しかも短いです。駄文です。ご覚悟めされよ！！

## 麒麟児と秀才と賊主

「仕事中悪いな」

そう言って賊の広間に入った俺は、異様な光景を目の当たりにした。

「か、勘弁して……くらはい……あがああ!!」

「ならんわ!! 貴様は我等の掟を破った!! それがどういふことかは知っているだろう!!」

たくさんの人が円になり、たった一人の男を囲んでいる。その囲まれている男はなんと、剣山に固定させられ正座させられた上、親玉とみられる男に鉄棒で打たれていた。

端から見ても分かる。これは懲罰だ。打たれている人間は衣服の特徴から先ほどまで俺達が追っていた人間だと分かる。

「我が同胞達よ!! この男は我等の掟を破った!! まさに万死に値する行為だ!!」

おお！！ と周りの人間が叫ぶ。士気は異常に高く、親玉の力りスマ性がうかがえる。……にしてもこの親玉、どこかで見たことがある後ろ姿だ。誰だ？

「では諸君に問いたい……我等が掟を破ったこの男に、どのような罰を与えるべきか!?」

『死！！ 死！！ 死！！』

「よろしい！！ ならば死だ……あれを持ってこい！！」

それは異様な光景だった。蒼里は目を見開いてそれを見つめていたが、俺はそんなことより、その親玉が持ってこさせた武器に目を奪われた。巨大な蛮刀。それは俺がよく知っている武器だったから。

「同胞達は貴様に死を望んだ……」

「か、勘弁……」

「ならば死をもってつくなえ！！」

高く振り上げられた蛮刀は、ほとんど重さだけで振り下ろされた

よっに見えた。サクッ。似合わない音を立て、賊の首が落ちた。

「……さて、ようこそ旅び、と……」

親玉は振り向く。その瞬間、親玉の目が見開かれた。おそらく、俺の目も見開かれているだろう。

「え、炎麒か!？」

「お前……やっぱり伊佐か!？」

たまらなくなつて駆け出す。伊佐もこちらに向けて走り出した。

「炎麒!!」

「伊佐!!」

そして俺は槍の包みを引き剥がし、奴は蛮刀を構え……

「「死ねやオラアア!!」」



真っ向からぶつかり合った。

『はいいいいいい！？』

たまらず突っ込みを入れる蒼里と周りを囲んでいる方々。その突っ込みにも構わず、俺と伊佐はバツバツと打ち合いを続ける。

「まだ生きていたか！！」

「くたばりぞこないめが！！」

本気の打ち合い。が、俺の顔は次第に綻んでいく。懐かしい友との再会だ、当然か。

「いいかげんにしろ！！ 周りが迷惑しているだろうが！！」

蒼里に諭されやっとな手を止める。……少しぐらいいいだろうに。

「おう、炎麒、この姉ちゃんは何者だ？」

「私もお前が何者が聞きたいのだが」

伊佐の質問に蒼里は苦笑しながら答える。伊佐はそれを聞きニヤリと笑った。

「とりあえず二人とも天幕に來いよ。そこで話そうじゃねえか」

伊佐の先導で、天幕に向かう。その際に、伊佐が片手を振ると、一瞬で兵達が四散した。

”鍛えあげられている……流石は伊佐だな”

天幕に入り、席に腰を落ち着ける。それを見るやいなや、伊佐が話し出した。

「なら俺から名乗らせてもらおう。俺は沙摩可シヤマカ、字は昂叔ウツユクだ」

「私は徐庶、字を元直と言う。真名は蒼里だ」

「んあ？ 真名を許してくれんのか？」

怪訝な顔をした伊佐に蒼里は含み笑いをする。

「お前は炎麒と真名を許したほどの間柄なのだろう？ こいつがそれほど信頼している奴に真名を預けないわけがあるまい」

「んーあ、なら俺も預けなくちゃな……俺の真名は伊佐<sup>イサ</sup>。以後よろしく」

蒼里と伊佐が握手を交わす。さて、自己紹介がすんだ所で……。

「お前は何でここにいるんだ、伊佐」

「それより先に、炎麒と伊佐の関係を知りたいのだが」

俺の質問に蒼里が質問をかぶせる。俺としては早く伊佐に訳を聞きたかったが、蒼里に説明しなくてはならないか。

「あれは俺がまだ水鏡先生の下に行く前だったな……俺は天水を飛び出した後、隴西郡に向かったんだ。……理由は特になかったがな」

……まったく、この話は長くなるつてのによ……。



## 麒麟児と秀才と賊主（後書き）

予定では次に朱里の話を入れる予定だったのですが……次回は過去話です。申し訳ありません……。

あと、沙摩可の字はオリジナルです。字は分かっているのでは。

麒麟児 in 隴西郡（前書き）

注意。今回は激しく駄文です……まだまだ勉強せねば……。

更新遅れてすいませんでした……。

## 麒麟児 in 隴西郡

「義賊？」

何年前だったか……いきがって隴西郡界隈を闊歩して、その時から武術には多少の心得（といても今とは比べ物にならないほど未熟だが）があり、そこらの賊には敵無しの状態になって舞い上がった頃……そんな時に、俺は義賊の噂を聞いたのだ。

曰わく、権力をかさに至福を肥やすつとこどつこい共しか狙わず、それで奪った金品等々は官吏に虐げられている貧しい農民にはらまく。……石川五右衛門。なんかそんな名前が浮かんだな。今。これが電波というやつか。

まあとにかく俺は義賊達に興味を持ち、そいつらが根城にしている涼州は隴西郡の山城に向かってみたのだ。

……まあ無謀だろう。噂じゃそこんじよそこらの賊より圧倒的に鍛えられているという話だし、まるで軍隊のように的確かつ合理的な動きで、嵐のように作戦を遂行するのだという。……どこの秘密結社だそりゃあ。

ま、ドンパチするつもりはない。それに……見てみたかったのだ。鍛えあげられた軍隊って奴を。今まで見た軍隊……ことに官軍は上

が腐ってるからか、おせじにもいい動きとは言えなかった。

そんな訳で、一路山城へ。

「……これ城かオイ!？」

……山城に来たつもりだったのだが。……あえて言おう、『宮殿』  
であると!!

山城とは似ても似つかぬ。というか造りがしつかりしすぎだ。しかも石垣はあるものの、その奥は城というにはあまりに華やいだ印象を受ける木での造り。しかもそれでいて守りにも計算出来るように造ってある。どこの一級建築士が造ったというのだ。本当に賊の城かこれ？

あまりの驚きに呆けていると、門番であろう男が一人、近づいてきた。

「何用かな、お客人？ 用が無いならすぐに背中を向けて帰るかい」

……さて、今の俺にはどんな選択肢がある？



たたかう  
にげる  
はなしあう

……よし、兵の練度を見せてもらおうとするか。

たたかう ピッ

「そうですね……ま、道場破りって奴です」

「な……」

言い終わる前に踏み込み、石突を繰り出す。普通の賊なら一撃で昏倒ものの一撃。しかし……。

カンツ。小気味よい音と共に、槍が剣に止められる。

「……に。おい、『何』ぐらい言わせろ、道場破りとやら」

その言葉と同時に、俺の鳩尾に拳が打ち込まれた。鈍い衝撃が走り、意識が段々薄れていく。薄れていく意識の中、俺は漠然と思っ

た。

”……』にげる『選択しときゃ良かった”

「……。……ぜ……？」

「……た……！！ わた……のだから」

誰かの話し声に徐々に意識が覚醒する。話し声は一人の男と一人の女のものだった。男の方は俺が拳を打ち込まれた奴だ。

57

薄目を開け、周囲の状況を確認する。驚いたことに、ここは普通の部屋だった。牢屋ぐらいに放り込まれてるかと思っていたのだが。

牢屋にも入れないとは不用心なことこの上無いが、腕はさすがに拘束されているか……。昴龍顎閃も視界の中には無いし、逃げるのは難しいか……。

さて、皆さんにはある疑問があるかもしれない。捕まえられて殺される可能性もあるのに、何でこんなに冷静なのか？ 答えは簡単だ。それは、俺が街で聞いた噂に起因する。

・ ・ ・曰わく、仲間になる者拒まず。されど敵し・ ・ ・

つまり、仲間に入ろうとする者は拒まない。だが、訓練や規則は厳しい。そういうことなのだろう。

だったら、仲間になればいい。義賊というのも噂を聞いた時にはもう気に入っていた。それに、さっきの男が特別なのかもしれないが、兵の練度もいいようだ。『本物の軍隊』。それが見れそうだった。

「む、起きたようだな」

「……ええ。なんとか」

鳩尾を殴ってきた人に気づかれた。もう一人の女も歩いてくる。

さて、改めてこの二人を見ることになったのだが、俺を殴った方はまさに『歴戦の勇士』のような人だった。体には無数の傷があり、筋骨隆々。

もう一人の女は、俺より少し年上。長い黒髪に綺麗な顔立ち、美

形と言うにふさわしい容姿をしている。こちらを物珍しそうにじろじろ眺めている。……見せ物じゃねーぞコラ。

「では、自己紹介といこう。俺は沙摩貴<sup>シヤマキ</sup>。字は撃正<sup>ゲキセイ</sup>。そしてこいつが……」

「臧覇。字は宣高。以後よろしく」

「いやいや待て待て!?!」

何でいきなり自己紹介なんか始めてんの!?

「む? 貴様は我が軍に入隊しに来たのだろうか?」

「いやいや、そんな話まだあんたらに言っていないよな!?!」

「『まだ』? なら入りに来たんだよね?」

「うぐっ……」

臧覇さんに揚げ足を取られた。つか、そのためだけに鎌をかけた

のか？

「くつくく。これは失敬。ただな、この女が『コイツはうちに入りに来たんじゃ？』とか言っただからな」

「じゃなかったらうちにいきなり来るなんて無謀なもの」

臧霸さんが髪をかきあげる。美しい黒髪が舞った。

「……ええ、まあそんな所です。少し興味がありました」

「よし決まった！！ なら、俺の真名は晴海せいかいじゃ！！」

「私の真名は義恋ぎれんよ。そうと決まれば……入ってきなさい」

臧霸さん - 改め、義恋さんが部屋の外に声をかける。その間に、沙摩貴さん改め、晴海さんが俺の戒めを解いてくれた。

「失礼します、筆頭、父上」

入ってきたのは、俺と同じくらいの年齢の男。まだ若いが、体は

よく鍛えてある。背中に背負うは蛮刀。かなりの筋力があるとみた。

「今日から君の教育係を頼む奴よ。ほら、自己紹介」

男はこちらに向き直った。

「俺は沙摩可。字は昂叔ってんだ。真名は伊佐、よろしくな」

「ああ、よろしく頼む。俺は姜維、字は伯約。真名は炎麒だ。……筆頭？」

ついさっき、伊佐は部屋に入ってくる時に『筆頭』と言ってたが……。

「あ、私だよ、私」

「義恋さんが声を上げる……は？」

「義恋さんが筆頭なんですか!？」

「どういう意味だー!! 確かに筆頭っぽくないけど私が筆頭だー」

「!!」

「じゃあ、炎麒が昔いた義賊の仲間だったのか」

「ああ。俺はそれから少しして、学問を学びたかったから義賊を出たんだ。その後どうなったかは知らなかったんだが……」

義賊の本拠地は隴西郡。こんな所にいるのはおかしいと思うのだが。

「俺たちは解散したよ……親父が死んだのをいい機会にな」

伊佐がついでくれた酒を飲み干す。

「晴海さん、死んだのか」

「ああ。大往生だった。解散してからは皆は俺か……義恋さんについてった。なんか義恋さんは今、どこかの諸侯にいるらしい」

「……そうか」

「そこで、何だかな炎麒」

伊佐が酒を飲み干し、こちらに真面目な顔を向けた。

「お前がのんきに女と二人旅なんかしてるとは思えねえ。そこで、ここからは俺の推測だが……お前ら、戦場に出に来たな？」

……見事なものだ。あつさり俺や蒼里の目的を看破した。圧倒的な武力だけでは軍を従えることなど出来ない。必要なのは他人を読む力。伊佐には、その洞察力がある。だから俺は、全てを話す。

「ああ。実はかくかくしかじかでな……」

「ふむ、まるまるつまつまという訳か。なら話は早い」

「勝手に簡略化するな」

蒼里の突っ込みが入るが、気にしない。



「なら、俺達を率いてみないか？」

「いいのか!？」

伊佐からの申し出。それは伊佐が率いている部隊を、共に率いてみないかという物だった。

「炎麒と共にいた皆もいるし、お前なら文句なしだ」

こちらから見ると・・・いや、こちらから見てもあちらから見ても、この話には利点がある。俺と蒼里はいきなり将として戦えるし、こいつらは兵としての数は少ないが、練度は抜群だ。数の問題は後でなんとかするとして、こちらにはいいことづくめ。

対して伊佐。伊佐はおそらく、一人で兵をまとめあげるのに限界を感じている。兵があまり多くないのもそれが理由だろう。もちろん俺が義賊にいた時は有力な将はいたのだが、みな義恋さんについていったか、解散した時に離れたかなのだろう。

つまり、この話は互いにすごいウマい話である。よって……

「受けさせてもらおう、伊佐」

「私も同じく、だ」

その返事に、伊佐は満足げに大きくうなずく。

さて、とにもかくにもこれ場所で黄巾と戦う力は持てた。  
とりあえず、乱世に一步を踏み出すことは出来そうだ。

麒麟児 in 隴西郡（後書き）

次回は朱里サイド、そして他の諸侯の話になります。

朱里思う。そしてある女達は……（前書き）

えーと、まず謝ります。すみません。

今回、前半は……まあ朱里ちゃんに萌えてもらえれば良いのですが、後半が少し、いやかなり原作キャラ改変があります。もはや別人です。誰かといいますと……桃香です。

桃香がキャラ改変など認めん、という方は即刻ブラウザバックをお願いいたします。

朱里思う。そしてある女達は……

朱里 side

……ああ、今日も陽が沈みます。

「んしょ……」

読んでいた本を閉じ、重ねて持ち上げてよたよた歩く。重いけれど、大丈夫。

あの日――炎麒さんと蒼里さんがここから旅立っていった日から、私と雛里ちゃんは今までにないほどすごい勉強を始めた。あらゆる書物を読みあさり、知識として吸収する。……多分、かなりの知識を身につけたはず。

……でも、多分まだあのお二人を越えてはいけません。もちろん根拠は無いですが……多分間違いないです。

まだまだ学ぶ事はたくさんある。そう思いながら部屋へと向かう。その途中、私はある部屋の前でふと立ち止まった。

……そこは、炎麒くんの部屋。あの日以来、この部屋には入らなくなった。……夜に寝ぼけて入ることも、なくなった。

……何ででしょうか。前は二日に一回は寝ぼけて入りこんでいたのに。

そう思いながら、私はなんとなく、本当になんとなく、炎麒くんの部屋の扉を、本を抱えていたから足で開けた。

炎麒くんは基本的に布団をしまわない人だったので、布団はしいたまま。部屋の中は夕日が差し込んで緋色に染まり、なんとなく、幻想的な雰囲気醸し出していた。……その雰囲気の中に、かすかに炎麒くんの香りがして、私は思わず……本を取り落とした。

いけない、拾わなくちゃ。そう頭では思っているのですが、行動がついてこない。ほのかに漂う炎麒くんの香りが、じわじわ私の頭を痺れさせ、麻痺させていく。不快な香りなんかでは、決してない私にとって、この香りは果てしなく、果てしなく甘美な物だった。本を拾わなくちゃと思っても、私の目にはもう、炎麒くんの香りを発している布団しか映らない。

私はふらふらしながら歩き、炎麒くんの布団に倒れこんだ。もうそうしたら、我慢が出来ない。無我夢中に布団に抱きつき、顔をうつめる。

「炎麒……くん……」

思い人の名前をつぶやきながら、布団に顔をうずめ、ほのかな香りを一心不乱に嗅ぐ。こんなところを見られたら……私の思考回路は、もうそんな考えが出来るほど、働いてはいなかった。甘美な香りが、私の思考回路を麻痺させた。

そのまま、一心に布団を抱きしめ、香りを浴び、嗅ぐ。こんなこと、今までしたことがなかった。そのことから、一つの結論をはじき出す。麻痺している思考回路でも、それだけは簡単に考えさせた。

” ああ……わ、私は……本当に、本当に、炎麒くん……好きなんです…… ”

そう考えながら、私はいつしか眠たくなった。愛しい人の香りに包まれ、意識がどんどん薄れていく。最後にまた、布団を抱きしめて香りを浴び、私は意識を手放した。

……今ここに、一人の少女が、自らが抱く思いに気づくこととなる。未来において、それは実を結ぶこととなるのか、それとも……儚く、散ることとなるのか。

それを現在で、知る者はいない……。

????side

「ね、愛紗ちゃん」

「何でしょうか、桃香様」

幽州。ここに、わずかながら兵が駐屯していた。

その天幕の中。女が二人会談を行っていた。片方の女が、書簡を読んでいる。

「愛紗ちゃんは頭がいいし、これの意味も分かってるんでしょ？」

「はい。黄巾の檄文でありましょう」

ふむふむ、とか言いながら桃香と呼ばれた女性は書簡に目を通す。

「国を……腐りきった漢王朝を倒すのを義とし、民を救う……。大まかに言えばそんな感じか。……そんな大層なこと本当に考えてる



のかな？ 民達は黄巾の全てを分かってるのかな？」

「……分ならずとも、救いを求めるのが民というものです、桃香様」

「うん、お見事だね、愛紗ちゃん」

桃香と呼ばれた桃色の髪をした美しい女性は、ニヤリと笑みを浮かべる。上に立つに値するかのようなカリスマ性を感じさせる笑み。『悪い笑み』とはこんな笑みを言うのだろうか。

「それにしても、愛紗ちゃん。義、義、とか言ってるけど………こんなもの、義でも何でもないよね」

桃香は書簡から目を離し、愛紗を見る。愛紗も視線をそれに合わせた。

「義は言葉に出来る物じゃないし、言葉にする物でもない。ましてや反乱の理由に使う物じゃないんじゃない？」

「おっしやる通りです」

ニヤリと笑みを見せる桃香に、はっきりと答える愛紗。その答え

に満足したか、桃香はさらに笑みを深めた。

「それじゃ決定だね。この劉備玄徳の道。この戦いから始めさせてもらつよ!」

朱里思う。そしてある女達は……（後書き）

華琳や雪蓮にも負けないかっこいい桃香を書いてみたかっただんで  
す……すいません。

イメージとしては蒼天航路の劉備っばいです。

『霸王』(前書き)

短いですが、キリがいいので投稿です。

## 『霸王』

- 炎麒 side -

順風満帆。こんな言葉を知っているだろうか。今の俺達には、その熟語がピッタリであった。

相手を選んでいるからだろうか……連戦連勝。負ける気しない。無敵状態である。

何故か。まあ第一には兵の練度が違う。鍛えてある兵と農民、どちらが強いかは火を見るより明らかだろう。『質は数に勝る』。城を攻める場合などではそうではない、と断言するが、こんな平地での白兵戦では、質は大事だと俺はそう考える。

では、圧倒的な数の暴力にはどうするか。そこで冒頭の『相手を選ぶ』というのが重要となる。

兵法の基本とは、『勝てない戦はしない』ことである。兵法家にとっての戦とは、準備を万端にしてから必ず勝ちを取る物だと俺は考える。つまり……勝てそうになかったら、付近に救援を頼んで戦うか……策を練り上げ、準備をしつくして戦うか。どちらにせよ、時間をかける。

……その間に民が襲われる可能性があると考えたと、やりきれないが……勝つためには仕方がないと、割り切るしかない。……九を救うためなら、喜んで俺は一を差し出そう。……朱里や雛里のような頭は俺にないからな。

っと、しみつたれている場合ではなかった。とにかく、今俺たちの軍はかなりの拡大を見せている。最初は500の少数精鋭に過ぎなかったが、現在では志願してきた兵や黄巾から改心した者などで、数は実に三倍、1500まで上がっている。……もちろん、練度はいまいちだが、こればかりは仕方がない。

戦力の拡大に伴い、俺達は主戦場を北に移していった。黄巾の本拠地は北だ。主戦場を移すのは当然のこと。

……そして、今俺たちは……凄まじい物を見ることとなる。

「……すげえな」

思わず感嘆の声が出る。眼下で3000の隊が戦っている。相手は8000の黄巾賊。……敵の半分の数にも関わらず、3000の兵は優勢に戦っているのである。

正面からの突撃、敵を分断。右に抜けてから反転、鋭く切り返し

「またもや突撃。縦さま、横さま、十文字。3000の兵がまるで一つの生き物のように8000の集団をかけ割りかけ割り、打ち砕く。」

「……よほど凄まじい指揮系統と、よほど調練された兵でした出来ない。神業……というには大仰にしても、少なくとも……。」

「……今の俺たちには出来ないな」

「……悔しいけど否定はしない」

「俺と同じく、あの兵の見事な動きに見とれていた蒼里が言う。伊佐も悔しげだったが、何度もうなずいた。」

「……蒼里、伊佐。いくらあいつらが強くても多勢に無勢だ。今からあいつらは右に抜けるから、そしたら一気に行くぞ。それで挟撃の形になる」

「ああ、分かった」

「聞こえたかお前ら！！今からあの隊の救援に入る！！各員一層奮励努力せよ！！」

蒼里は頷き、伊佐は兵を鼓舞する。兵の皆もあの軍の動きを見て奮い立ったようだ。実に好都合。

「……さて」

もう一度戦場を見下ろす。相も変わらず3000の兵は一つの生き物かのように動き回っている。――俺の中に、ふつふつとある感情が芽生えてきた。

――あの軍を率いたい。自らの手足のように、自らの意のままに、まるで一つの生き物かのように動くあの軍を。

「……くくっ」

自然と、笑みがこぼれた。――ついに、見つけた。我が仕えるべき所を。

槍を握る手に力がこもる。しかし、俺の表情は微笑をたたえたままだった。静かに槍を戦場に向け、微笑をたたえたまま呟く。

「……全軍突撃」



- 華琳 side -

「華琳さま!! あちらから兵団が突撃してきております!!」

春蘭の報告に、私は目を向けた。小高い丘から、兵団がこちらに  
向けて突っ切ってくる。

「……1500ね」

ざっと見て新手の兵数を把握する。流して見たが、恐らく間違え  
てはないはず。

「敵の援軍でしょうか? もしそうならこの私が……」

「よく見る姉者。頭に黄巾を巻いている奴がいるか? 恐らくは味  
方だろう」

「むっ……」

秋蘭の言つとおり恐らくは味方……私達が右に抜けるのを待つていたのか。

「……いい判断ね……私達との挟撃が成功するには、この一瞬に突撃をかけてくるしか無かった。それを難なく……素晴らしいわ。春蘭、秋蘭、反転した後、突撃、行くわよ!!」

「はっ!!」

私達はすぐさま隊列を切り返す。この程度の急転換、私達には何の問題もない。伊達に兵を鍛えている訳じゃない。

「さあ、この挟撃を作り出した将の顔、見てやろうじゃないの」

素晴らしい突撃の機会の把握。そしてそれを実現出来る鍛えられである兵の質の高さ。さぞかし見事な将が率いているはずだ。

「いいわね……欲しい所よ。私が自ら、試してあげる」

私は久しぶりの人材発掘の予感に、ニヤリと笑みを浮かべた。



『霸王』(後書き)

何度か言っていますが、この小説のヒロインは朱里です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1308u/>

---

真・恋姫十無双～麒麟児、外史を駆ける～

2011年10月1日21時47分発行